

棚尾まちづくり事業

平成 23 年 9 月 22 日（木曜日）

第 3 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など
弥生の井、盆踊り、火の見やぐら、杉村修平など

- 2 テーマ 5 「地震の記録」
 - (1) 資料説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 3 テーマ 6 「神楽」
 - (1) 資料説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 4 連絡事項・情報交換など

- 5 次回日程
第 4 回 10 月 27 日（木曜日）午後 7 時から 「棚尾橋」、「源氏橋と棚尾港」

「地震の記録」

1 要旨

東日本大震災により私たちは改めて地震の恐ろしさを再認識し、地震への備えの大切さを痛感しています。

この地方を襲った、明治時代の濃尾地震や昭和の東南海地震及び三河地震など身近な災害の記録を資料により思い起こし、又、当時を体験された皆さんの話などをお聞きします。

2 この地方の地震の記録

碧南市における被害状況は、碧南市史資料 第50集 「災害史」及び他の文献等によると次のとおりである。

- ・ 霊亀 元年 (715) 5月26日
「三河に地震あり、多くの民家陥落する。正倉の破壊47箇所」(続日本紀)
- ・ 天平17年 (745) 岐阜県南部 大規模な内陸地震 1891年の濃尾地震に類似
- ・ 天長4年 (827) 7月12日 大地震
- ・ 天長10年 (833) 2月24日 大地震(続日本紀)
- ・ 斎衡2年 (855) 5月23日 大地震
- ・ 永長元年 (1096) 11月24日 東海地震 M8級 広域に被害、駿河で被害大
大津波
- ・ 明応6年 (1497) 大地震
- ・ 明応7年 (1498) 6月25日 大地震 8月25日にも 明応地震。東海地震 M8.4
広域に被害 この時、浜名湖は外海とつながる。
津波 房総から紀伊まで大被害。
遠州灘、駿河湾沿岸で8m 死者2万6000人という
伊勢、志摩で6~8m 溺死1万人など
- ・ 明応8年 (1499) 6月10日 大地震
- ・ 永正4年 (1507) 8月7日 大地震(三河国聞書)
- ・ 永正7年 (1510) 大地震

- 天正 14 年（1586） 1 月 18 日 地震があり被害が甚大であった。震源岐阜県北部
- 天正 17 年（1589） 大地震
- 慶長 10 年（1605） 本州南岸沖 東南海地震 慶長地震 M7.9
津波が非常に広範囲に及んだことから、房総半島沖にもほぼ同時に地震があったことも考えられる。津波は関東（犬吠埼）から九州（薩摩）に至る沿岸を襲い各地で大被害。
- 寛永 9 年（1632） 大地震
- 元禄 16 年（1703） 11 月 29 日 津波が襲来する
- 宝永 4 年（1707） 10 月 4 日 駿河湾又は遠州灘 M8.4 宝永地震
津波が起こり、伏見屋新田の大堤や水門が大破した
日本史上最大 東海地震と南海地震がほぼ同時に起こったともいわれる。被害は非常に広範囲に及び、全体で死者 2 万人 倒壊家屋 6 万 流出家屋 2 万といわれ津波は伊豆半島から九州に至る沿岸。約 50 日後に富士山爆発（宝永火口）
- 宝永 7 年（1710） 8 月 11 日 大地震
- 天明 2 年（1782） 大地震
- 弘化 4 年（1847） 善光寺地震 長野県北部
- 安政元年（1854） 11 月 4 日
1 回目 駿河湾～紀伊半島沖 安政東海地震
駿河―南海トラフに沿う M8 級 関東西南部から近畿にかけて各地に被害。津波は房総半島から四国を襲い、伊豆―熊野灘で 4～10m
2 回目 上記の地震の 32 時間後に発生
四国―紀伊半島沖 安政南海地震 南海トラフに沿う M8.4
地震は近畿南西部から九州北東部。津波は房総半島から九州に至る沿岸。
三河一帯で大地震があり、油ガ渕沿岸の田畑 1 尺 2 寸沈下する。前浜新田の地盤も 2 尺以上沈下する。津波も襲来した。西端の応仁寺本堂が倒壊する。元本堂と権現崎の中間にあった灯台が地震のために倒壊する。
「大地震 大津波末代噺廻種」
朝五ツ頃より大地震、それより昼夜少々づつゆり、昼七ツ過又々ゆり、夜五ツ半時又大ゆり、それより格別の大震は無之と云へども大抵人家崩れ、大道へ畳を敷、或いは小屋を掛け、夜を明し申候事、前代未聞の事ども也。
- 文久元年（1861） 2 月 13 日 大地震で小屋掛が各所にできた。

- 明治 24 年 (1891) 10 月 28 日 濃尾地震 震源岐阜県西部 M8.4
国内最大級の内陸地震大規模な地震断層 (根尾谷断層) が出現 被害全体死者 7,273 人 全壊家屋 14 万戸
(碧南市の被害は 3 に掲載)
- 大正 12 年 (1923) 9 月 1 日 関東大震災の余波で当地方は強震
- 昭和 19 年 (1944) 12 月 7 日 東南海地震 熊野灘沖を震源 M7.9 震度 6
死者 1,200 人 家屋全壊愛知県で 5,800 戸 但し、詳細は戦時中のため不明
津波 伊豆一紀伊半島 熊野灘沿岸で被害多し、尾鷲で 8~10m
(碧南市の被害は 4 に掲載)
- 昭和 20 年 (1945) 1 月 13 日 三河地震 震源 三河湾海底 M7.1 震度 6
振動が上下動と水平動の併合震であったので被害も多く出た。
死者 2,300 人 家屋 7,200 戸 戦時中で詳細不明
深溝断層、横須賀断層
(碧南市の被害は 5 に掲載)
- 昭和 21 年 (1946) 12 月 21 日 南海地震 震源和歌山県沖
- 昭和 23 年 (1948) 6 月 28 日 福井地震 福井県北部 地震断層

3 濃尾地震の被害記録

(1) 棚尾

ア 被害

| | | | | | | |
|------|----|------|----|------|------|------|
| 住家 | 全倒 | 6 棟 | 半倒 | 11 棟 | 毀損 | 34 棟 |
| 物置き | 全倒 | 12 棟 | 半倒 | 5 棟 | 毀損 | 12 棟 |
| 土蔵 | 全倒 | なし | 半倒 | なし | 毀損 | なし |
| 納屋 | 全倒 | 2 棟 | 半倒 | なし | 毀損 | 7 棟 |
| 学校 | 全倒 | なし | 半倒 | なし | 毀損 | なし |
| 死亡 | なし | | | | | |
| 負傷 | なし | | | | | |
| 河川堤防 | 欠所 | なし | 破損 | 2 箇所 | 32 間 | |
| 県道 | 欠所 | なし | 破損 | なし | | |
| 里道 | 欠所 | なし | 破損 | なし | | |
| 橋梁 | 破損 | なし | 落橋 | なし | | |

| | | | |
|----|-------|-------|-------|
| 社寺 | 全倒 なし | 半倒 なし | 毀損 なし |
| 醤油 | 7石 | 藍汁 | 9石6斗 |
| 竈 | 94組 | 煙突 | 13個 |
| | | | 瓦 凡千枚 |

イ 義捐金の給付

国などから義捐金が給付され。棚尾村文書にはその申請、受領、給付などの文書が多数残っていて、具体的な様子を知ることができる。

恤救金（じゅつきゅうきん）分配

住家 全潰6人 半潰45人 大破250戸 小破597戸 計898戸

ウ 税金の延納

地租、所得税など税金の減免に関する文書も多数残っている。

地租延納出願者人員区別調

| | |
|-----------------|------|
| 村内土地所有者 | 356人 |
| 同居者及び家族ニシテ土地所有者 | 15人 |
| 他町村ノ者ニシテ土地所有者 | 163人 |
| 土地ヲ共有スル者 | 3人 |

エ 震災復旧工事

震災復旧のため応急修復工事が行われ、その後、毘沙門通りの道路拡幅工事が行われた。

応急復旧工事

- ・源氏橋架換願 板橋 長さ6間3尺 幅7尺 棚尾村長長崎源司から愛知県知事 千田貞暁あて 明治25年2月29日
- ・里道平坂道 震災復旧工事 源氏～掘亀橋 明治25年11月 愛知県知事 施工 明治26年3月完成
- ・震災臨時堤防修繕願

| | | |
|----|---------|------|
| 森下 | 堤防破壊延長 | 長10間 |
| 雨池 | ナマコ堤防破壊 | 長60間 |

その後行われた道路整備工事

明治28年1月4日付け 額田郡岡崎町ヨリ碧海郡大浜町ニ通ズル里道改修工事

命令書 毘沙門通り 幅員 28尺(8.4m)～2間(3.6m)

(2) 碧南市内の他地区

ア 西端

家屋の全倒 13 棟 半倒 92 棟 倉庫の倒壊 3 棟 応仁寺の倒壊

イ 鷲塚村

住居の全倒 2 棟 半倒 8 棟 大破 16 棟

ウ 北大浜村

住家 全倒 4 棟 半倒 18 棟 大破 366 棟 小破 840 棟

土蔵 全倒なし 半倒 2 棟 大破 10 棟 小破 50 棟

物置及び灰屋類 全倒 40 棟 半倒 105 棟 大破 495 棟 小破 1,140 棟

公共物 小学校小破 3 棟 寺院小破 5 棟 社殿小破 20 棟

その他 負傷者 5 名 (男 1 人 女 4 人)

道路崩壊 7 箇所 156 間 橋梁崩壊 3 箇所 7 間

板柵崩壊 8 箇所 圪樋破壊 4 箇所

護岸石垣崩壊 8 箇所 151 間 堤防崩壊 1 箇所

海岸崩壊 1 箇所 油が洩沿岸崩壊 1 箇所

エ 前浜

地盤沈下

(3) お聞きした話など

- ・ 古老の話を聞くとこの地震の余震やら、家屋倒壊の者は空地又は竹やぶに小屋掛けをして二ヶ月も過ごしたといわれる。
- ・ 妙福寺の秋葉社常夜灯は石組みが壊れた。

4 東南海地震の被害記録

(1) 棚尾

ア 被害

居宅 全壊 24 棟 半壊 44 棟

物置 全壊 26 棟 半壊 10 棟

工場倉庫 全壊 22 棟 半壊 3 棟

その他 半壊 22 戸

死者 5 歳の男子 1 名 重傷者 6 歳の女子 1 名 軽傷者 1 名

学校窓ガラス 6 枚破損 役場窓ガラス 6 枚破損

(2) 碧南市内の他地区

ア 大浜

碧南駅前付近に倒壊家屋が多く、大浜小学校の田を埋めて造った校庭から 10 cm ~30cm の高さに水が各所で吹き上げるという現象も見られた。

イ 西端

| | | | |
|----|----------|---------|----|
| 住居 | 全壊 38 戸 | 半壊 64 戸 | |
| 納屋 | 全壊 132 戸 | 半壊 60 戸 | |
| 学校 | 半壊 1 棟 | 応仁寺の門 | 倒壊 |

ウ 旭

| | | | |
|----|----------|----------|----------|
| 住居 | 全壊 12 戸 | 半壊 76 戸 | |
| 納屋 | 全壊 201 戸 | 半壊 280 戸 | |
| 死者 | 2 人 | 重傷者 3 人 | 軽傷者 20 人 |

エ 大浜町、新川町は記録なし

オ 概況

この地震による人畜の被害は昼間であったため少なかった。尚、大工、左官の工作隊も編成され、復旧作業に活動した。余震は翌年三河地震まで続き 234 回あった。

5 三河地震の被害記録

(1) 棚尾

ア 被害

| | | | |
|--------------------|----------|----------|----------|
| 住居 | 全壊 96 戸 | 半壊 135 戸 | 破損 342 戸 |
| 物置倉庫 | 全壊棟 46 棟 | 半壊 526 棟 | 破損 62 棟 |
| 軽傷者 | 6 名 | | |
| 学校及び学童疎開宿舎に関する事項 | 被害、死傷者なし | | |
| 道路、橋梁等の被害緊急対策に関する件 | 被害なし | | |
| 棚尾橋で 1m 沈下 | | | |

イ 被害復旧対策に関する事項（以下、東南海地震と合わせて）

1 月 13 日 各町内会毎に全壊家屋の取り片付けを施行
1 月 14 日 緊急工作隊を編成し（大工 26 人、左官 8 人、鳶 22 人）復旧に努めた。

地震災害住宅復旧資材特別配給申請

木材 2,500 石、釘 45 樽、針金 50 ㇾ、瓦 50,000 枚、杉皮 500 足、
セメント 250 袋、土管尺五 280 本、同五寸 620 本

資材を 3 月 11 日から町民が字毎に割当で出動して、櫻井村へ受け取りに行く。
木材 1,500 石が蒲郡森林組合から貨車で棚尾駅に着いた。

この他資料として「棚尾町震災復興日誌」「震災復興記録資材部」等がある。

ウ 住家全壊家屋 121 戸の震災後の生活

| | |
|-----------|------|
| 急設小屋掛けのもの | 59 戸 |
| 物置其の他自己の家 | 43 戸 |
| 親戚知人 | 11 戸 |
| 他町村 | 5 戸 |

エ 救援体制

勤労奉仕

| | | | | |
|-----------|----|---------|----|-----|
| 軍隊 中部第二部隊 | 人数 | 250 人 | 日数 | 7 日 |
| 警防団 | 人数 | 580 人 | 日数 | 4 日 |
| 在郷軍人 | 人数 | 270 人 | 日数 | 2 日 |
| その他 | 人数 | 1,888 人 | 日数 | 5 日 |

労力援助のみならず 罹災者に対しての救援物資も各地から送られ、罹災救助
基金法により死亡者埋葬費、小屋掛費、就業費等の援助金も下り、又、ラジオ聴
取料なども全壊、半壊者に 6 ヶ月分免除（棚尾 34 人）等あらゆる救援の手が差し
伸べられた。

大浜の火葬場も全壊したので、それからは棚尾の火葬場が使われた。

(2) 碧南市内の他地区

ア 西端

| | | | | | |
|----|------------|-------|------|---------|------|
| 住居 | 全壊 | 145 戸 | 半壊 | 280 戸 | |
| 納屋 | 全壊 | 183 戸 | 半壊 | 305 戸 | |
| 工場 | 7 棟 | | | | |
| 神社 | 社務所、神楽殿が倒壊 | | 寺院 | 4 か寺が倒壊 | |
| 学校 | 1 棟倒壊 | | | | |
| 死者 | 26 人 | 重傷者 | 10 人 | 軽傷者 | 15 人 |

イ 大浜

住居 全壊 241 戸 半壊 1,050 戸

納屋 全壊 165 戸 半壊 610 戸

学校 1 棟半壊（渡り廊下）

死者 26 人 重傷者 50 人

字塩取場、学校付近が被害甚大であった。

ウ 新川

住居 全壊なし 半壊 80 戸

納屋 全壊 66 戸 半壊 300 戸

エ 旭

住居 全壊 14 戸 半壊 70 戸

納屋 全壊 220 戸 半壊 250 戸

死者 2 人 重傷者 5 人

オ 前浜新田

地盤が 1 尺 5 寸以上も沈下し、樋門からの自然排水はできなくなった。

カ 概況

大浜地区と西端地区の被害が甚大であった。2 回にわたる震災の後、余震も長く続き、19 年 12 月 7 日から 20 年 2 月 28 日までに 1,128 回を数え、余震を恐れて小屋掛の生活を送った者も多かった。ことに酷寒の折、布団の上に雪を積もらせて寝るといふ風景も見られた。尚、2 回にわたっての大地震は戦争の真っ最中であったため、被害の調査報道が志気を阻害するものとして制限され、公式な記録は極めて少なかった。

東南海地震と同じように工作隊を編成して復旧に努めた。救援物資も各地から送られ、災害救助基金法により罹災者への救助金も多額に下がった。

(3) お聞きした話

- ・ 三栄座にいたが、八柱神社に避難し収まって帰ると停電になっていた。
- ・ 安専寺の疎開児童 40 名は無事だった。名古屋市の堀田 5,6 年生（昭和 8 年生）
- ・ 平岩慶一氏回想録から抜粋 「鋳物工場が倒壊した。戦時中のことで、建設資材が不足していた時、警察署からお宮の木を伐って使ってもいいので、早く再建するように話があった。父種治郎に話すと、その話には乗るなということだったので断った。父から貴重な教訓を学んだ。」

| 町村名 | 住家 | | 非住家 | | 学校 | 死亡者 | 重傷者 | 学童疎開 死傷 | 寄宿舎 | 被害甚大ナル部落 | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|-------|----|-----|-----|------------|-----|--------------------|----------------|
| | 全壊 | 半壊 | 全壊 | 半壊 | | | | | | | |
| 安城 | 186 | 518 | 398 | 530 | 1 | 21 | 22 | 1 重1 | 1 | 福釜、赤松、箕輪、南明治 | |
| 依佐美 | 115 | 435 | 300 | 763 | | 10 | 25 | | | 小垣江、高棚 | 小垣江誓満寺、高棚空臨寺 全 |
| 高浜 | 89 | 390 | 336 | 1,530 | | 31 | 10 | 14 重4 | 3 | 高取 | 高取疎開死者中教員2、寮母2 |
| 新川 | 0 | 80 | 66 | 300 | | | | | | | |
| 大浜 | 241 | 1,050 | 165 | 610 | 半1 | 17 | 50 | | | 塩取場、学校付近 | 鶏500羽 |
| 棚尾 | 110 | 380 | 70 | 252 | | | 5 | | | | |
| 旭 | 14 | 70 | 220 | 250 | | 2 | 5 | | | 流作 | |
| 明治 | 1,028 | 1,200 | 1,227 | 1,250 | 7 | 326 | 296 | | | | 寺院全壊7 神社全壊2 |
| 櫻井 | 435 | 458 | 919 | 973 | 半1 | 170 | 200 | | 3 | 藤井 | |
| 六ツ美 | 119 | 145 | 136 | 164 | | 13 | 8 | | 1 | 中島、福桶、安藤、上三ツ木、下三ツ木 | |
| 矢作 | 117 | 128 | 203 | 103 | 1 | 16 | 14 | | 2 | 河野、酒戸島、富永、新堀 | |
| 上郷 | 3 | 20 | 22 | 209 | | | | | | | |
| 高岡 | 33 | 121 | 49 | 154 | | 2 | 1 | 2 重2 | | 駒場、中田 | |
| 富士松 | 14 | 90 | 23 | 92 | | | | | | 和泉田、築地 | |
| 知立 | 38 | 206 | 43 | 94 | | 5 | 6 | | | 知立 | 岡本工業、岡本ミシン、官公署 |
| 刈谷 | 55 | 393 | 95 | 241 | 1 | 1 | 6 | | | | 工場9棟全壊 |
| 計 | 2,597 | 5,684 | 4,272 | 7,515 | 10 | 614 | 648 | 17 | 10 | | |

| 区 分 | 被 害 坪 数 | | | 復 旧 費 | | | | | | | |
|------------|---------|----|-----|-------|-------|-------|--------|-----|-------|-----|--------|
| | 全壊 | 半壊 | 破損 | 改築費 | | | 補強・修理費 | | | 応急費 | 総額 |
| | | | | 坪数 | 単価 | 金額 | 坪数 | 単価 | 金額 | | |
| イ 一般施設 | | | | | | | | | | | |
| 棚尾町役場議事堂 | | | 8 | | | | 8 | 100 | 800 | | 800 |
| 〃 倉庫 | | | 30 | | | | 30 | 30 | 900 | 90 | 990 |
| 棚尾町隔離病舎 | 15 | 10 | 25 | 15 | 300 | 4,500 | 10 | 30 | 300 | 100 | 4,900 |
| 火葬場 | | | | | | | | | | 200 | 200 |
| 橋梁 | | | 24 | | | | 24 | 200 | 4,800 | | 4,800 |
| 小 計 | | | | | | | | | | | 11,690 |
| ロ 神社施設 | | | | | | | | | | | |
| 八柱神社 拝殿 | | | 30 | | | | 30 | 20 | 600 | | 600 |
| 〃 社務所 | | | 10 | | | | 10 | 50 | 500 | | 500 |
| 〃 水屋 | 2 | | | 2 | 1,500 | 3,000 | | | | | 3,000 |
| 〃 井戸屋 | 3 | | | 3 | 850 | 2,550 | | | | | 2,550 |
| 〃 玉垣、燈籠、鳥居 | 10 | | 5 | | | | 15 | 100 | 1,500 | | 1,500 |
| 神明社 本殿、拝殿 | | | 15 | | | | 15 | 100 | 1,500 | | 1,500 |
| 〃 鳥居、燈籠 | | | | | | | | | 1,000 | | 1,000 |
| 秋葉社 本殿、拝殿 | | 8 | | 8 | 550 | 4,400 | | | | | 4,400 |
| 小 計 | | | | | | | | | | | 15,050 |
| ハ 寺院教会施設 | | | | | | | | | | | |
| 妙福寺 参籠堂 | | | 30 | | | | 30 | 50 | 1,500 | | 1,500 |
| 〃 本堂 | | | 20 | | | | 20 | 20 | 400 | | 400 |
| 光輪寺 本堂 | | | 25 | | | | 25 | 30 | 750 | | 750 |
| 〃 水屋 | 6 | | | 6 | 700 | 4,200 | | | | | 4,200 |
| 安専寺 本堂 | | | 10 | | | | 10 | 50 | 500 | | 500 |
| 〃 土壁 | | | 20 | | | | 20 | 20 | 400 | | 400 |
| 小 計 | | | | | | | | | | | 7,750 |
| ニ 教育施設 | | | | | | | | | | | |
| 棚尾国民学校 奉安殿 | | | 4 | | | | 4 | 25 | 100 | | 100 |
| 〃 便所 | | | 4.5 | | | | 4.5 | 20 | 90 | | 90 |
| 〃 校舎屋根 | | | 5 | | | | 5 | 20 | 100 | | 100 |
| 〃 小使室屋根 | | | 20 | | | | 20 | 20 | 400 | | 400 |
| 小 計 | | | | | | | | | | | 690 |

「神楽」

1 要旨

八柱神社大祭で奉納される神楽は長い伝統を持ち、関係者のご尽力により今年も奉納されます。神楽は大太鼓、小締（小太鼓）及び笛に合わせ、着飾った巫女が舞う巫女神楽です。曲は近隣の神社とほぼ同じ内容で、旭流と呼ばれるものですが、口承で伝えられたため各地区によって若干異なり、それぞれの地区名で呼ばれることが多く八柱神社のは棚尾神楽と呼ばれることもあります。

藤井達吉もふるさとを懐かしみ「うぶすなの 祭り太鼓の 音聞けば 幼きごとし 我老いぬれど」と和歌に残しています。

祖先から受け継がれている郷土芸能を持つことは、私たちの宝であり誇りです。

2 神楽の種類と位置づけ

神楽の種別や分類等は参考文献も少ない上、記載内容も千差万別で、統一されたものがなく、多様な言い方がされています。しかし、其の中でも大凡は次のように分類されており、棚尾神楽はこの中では巫女神楽に位置づけられます。

(1) 神楽の分類

ア 御神楽（みかぐら） 宮中などで行われるもの

イ 里神楽 上記以外の神楽

(ア) 巫女神楽 巫女が舞う神楽、神がかりのために行われた舞が基となり、それが様式化して祈祷や奉納の舞となった。鈴、扇、笹、榊、幣など依り代となる採物を持って舞う

(イ) 出雲流神楽

(ウ) 伊勢神楽

(エ) 獅子神楽

(2) 流儀

一般的に次の3種類に分けられ、棚尾神楽は旭流に位置づけられている。

ア 宮流

イ 旭流

ウ その他の流派

但し、旭流についての定説等の資料は見つからなかった。

3 神楽奉納

(1) 日時 八柱神社の大祭

前夜祭 10月15日(土曜日) 16:00 ~ 21:00 (但し大人は22:00まで)

本祭り 10月16日(日曜日) 9:00 ~ 17:00

(2) 人員(平成23年)

神楽指導者 4人

神楽社中(中学生以上社会人まで) 21人

神楽練習生(小学生) 13人

巫女(小学5年生以下の女の子) 9人

(3) 演奏の順序

ア ^{かみお}神降ろし

イ ^{しんめい}神明 ^{そうしんめい}草神明 ^{わかば}若葉 ^{かみちかい}神誓 ^{おかざき}岡崎 ^{やぐるま}矢車

^{かすみ}霞 ^{はんま}半馬 ^{すごもり}巢籠り ^{さがりは}下り葉 ^{おおもんぐち}大門口

ウ 神納め = 神降ろしと同じ曲

エ ^{あげかぐら}上げ神楽(又は^あ揚げ神楽)

(4) 演奏形態(楽器構成)

大太鼓(長胴):1人、小^{こじめ}締(小太鼓):1人、笛(横笛):人数の決まりなし。
奏者は、太鼓と笛に別れ、太鼓は小締と大太鼓の両方を順番に奏する。

(5) 舞

原則は一人であるが、幼いため、二人の場合もある。

(6) 場所

八柱神社神楽殿。大祭前に神楽殿の囲い板を取り外し整備する。大祭翌日に再び
囲い板で保護する。

(7) 稽古

9月下旬から大祭まで、楽器は秋葉社、巫女さんは社務所で行い、最後の三日間は社務所で合同の稽古を行う。又、楽器は土用稽古といって7月下旬にも秋葉社で稽古する。

神楽譜は地言（じごと）と呼ばれる書いた譜が曲毎にあり、例えば、百ラ百ロ トイ百ライ百 トロ百一 …………… というものであるが、稽古の方法は殆ど先生や先輩から聞いて覚え、一緒に演奏しながら習得していく。

4 沿革等

(1) 新聞記事

少し古いが、昭和46年（1971）の新聞記事が分りやすいので掲載する。

郷土の民俗芸能 ささえる人たち **棚尾神楽** =碧南市棚尾=
長期間の猛げいこ 笛の音は波より高く

碧南市森ノ崎、八柱神社の秋祭りに奉納される棚尾神楽は天保十年（1839年）から口伝で伝えられていると関係者は信じている。これは神楽の世話役、同市森下、溶接業、石川鉦平さん（39）が、あるとき神楽殿の屋根に登って松葉の枯葉を清掃した際、屋根ガワラに天保十年と刻まれていたことから神楽も同時に始まったという見方である。市内には大浜をはじめ六組の神楽があるが、棚尾神楽はこのなかで古い伝統を持ち、また一番うまいといわれている。

棚尾神楽の曲目はウヒャラヒーの笛ではじまる神降ろしから、神明、草神明、若葉、神誓、岡崎、矢車、はんま、かすみ、鶴がヒナを育てる曲のすごもり、さがり葉、大門口の十二曲とこのくずし十二曲、合わせて二十四曲ある。

いま受け継いでやっている人は石川鉦平さんをはじめ笛では石川佐吉さん（81）鈴木金七さん（73）太鼓では石川竹一さん（72）の古老のほか榊原幸一さん（42）榊原保さん（34）斉藤清さん（41）石川宗三郎さん（37）杉浦毅さん（33）小沢利男さん（36）斉藤保さん（33）ら二十五人。

けいこはきびしい毎年正月六日から二月四日までの寒げいこ、夏には七月の土用げいこ、さらに秋祭りの前一ヶ月間とけいこの期間も長い。

石川鉦平さん方では祭りがすんだいまでも長田隆治さん（25）杉浦清次さん（24）の二青年が毎夜笛の練習に励んでいる。昔のけいこは、指導者の前では終始正座で、スパルタ式で教えられ四年くらいで覚えた。いまはそのようにはできないので太鼓、

笛とも全曲かなでるには十年もかかるという。こうしたきびしい練習が実ってこの地方で一番上手な神楽となったといえる。

石川鉦平さんは「笛の練習に、西の海辺に立って吹いた。はじめは波の音の方が高く笛の音色がわからない。この練習を積むうち波の音に負けないようになれば一人前となる。」といていた。

直径 1.2 メートルの大太鼓を直径 6 センチのバチでたたくが、はじめは太鼓にはじかれて鳴らないともいう。

この古い神楽を長く伝えるため同市西山、会社役員永坂渉さん（56）はことしテープレコーダーに収めた。市文化財専門委員、林口孝さん（66）も今後調査するといっている。

(2) 藤井達吉和歌

八柱神社社務所 床の間に掲げられている「旭日群峰画賛」に載っています。

有布春奈農万都李堂い古のを東支氣波
遠散那伎許登志 和礼於非ぬ連抒
うぶすなの まつりだいこの をときけば
をさなきごとし われおいぬれど
産土の 祭り太鼓の 音聞けば
幼きごとし 我老ひぬれど

(3) お聞きした話

- ・ 昭和 49 年 10 月八柱神社大祭から、小中学生に参加してもらい、それ以降続いている。
- ・ 昔は、人数も多かったので、東部、南部、西部（さいぶ）毎に編成して、順番に奉納した。（楽器演奏及び巫女さんも含めて）
- ・ 稽古はそれぞれの部で「宿」と呼ばれる先生の家などで稽古した。先生によって多少演奏の仕方が違うので、誰に習ったかすぐ分った。
- ・ 昔の先生は、親切に教えてくれないので、見聞きして覚えた。
- ・ 神楽の奉納は八柱神社の大祭だけでなく、毘沙門さんの大祭、源氏組秋葉さんの祭礼、森下お不動さんの祭礼などで奉納したこともあった。
- ・ 頼まれて、豊田市挙母神社で奉納したこともあった。